



平成22年2月15日 卓話 『可能性への挑戦』

NPO法人勇気の翼インクルージョン2015 理事長

細川 佳代子 様



今日は私の人生を変えてくれた知的障がいの方たちとの交流についてお話しします。1991年、当時熊本において、夫が知事を引退したのを機に何か活動したいと考えていたとき、ダウン症で耳も不自由な10歳のともこちゃんが、スペシャル・オリンピックスの世界大会で銀メダルを取ったという記事に目がとまりました。そのともこちゃんを指導した女性をお招きして講演していただいたとき、彼女が紹介したある牧師さんのお話に私は頭を殴られたようなショックを受けました。「どんなに医学が進歩しても人口の2%は知的障がいの子が生まれてくる。その子たちは周りの人たちに優しさと思いやりの心を教えるために神様が与えてくださったプレゼントなんだ」というお話。すべて人は役目があって必要とされているから生まれてくる。この人たちと友達になりたい。彼らのよき理解者、支援者の一人になりたいと思いました。

当時、スペシャル・オリンピックスの参加資格は8歳以上であること、年間を通してトレーニングしていることのたった2つ。ともこちゃんはダウン症でとてもスポーツが苦手。それでも走って行ってぴょんと飛びができるようになった。片足で立って、もう片方を前や後ろに上げて静止するとか、いくつかのポーズができればレベル1という初級に出られる。予選はさらに女性と男性、年齢で分かれるんです。その子たちがマットに立ち音楽が鳴ると、これがスタートの合図。練習してきた踊りを始めるんです。ところがともこちゃん、音楽が聞こえない。コーチが前に立って合図するはずだったんですけど、コーチが立つ位置は指定されていて、そこから出たらいけないという決まりを直前に知るわけです。ともこちゃ

んコーチの合図にやっと気付いて演技を始めて、もう音楽は終わっていたけど演技を最後まで終えました。得点はレベル1の最低。でもスペシャル・オリンピックスの予選はディヴィジョニングといってクラス分け。

そのクラスごとに決勝があるんです。決勝ではともこちゃんすぐ演技を始めて4人中の2番で銀メダル。つまりそこで大切にしているのは、人に勝つことよりも昨日の自分に勝つこと。最後までベストを尽くした選手が勝利者という理念です。

日本の社会は競争主義。知的障がいの子たちは排除され、ほとんど就職できません。自立なんて夢。私はこの活動を日本中に広めよう、世界大会を日本で開催するまで頑張ろうと決心して、2005年、遂に長野でスペシャル・オリンピックスの世界大会が開かれました。今、47都道府県でボランティアが活動しています。ただ残念ながらまだ日本の8割の方が知的障がい者に対して無関心。知らないからです。彼らは本当に正直で純粋、とっても優しい人たちです。それと、この人たち絶対お仕事できるんです。その子に合った仕事だったら普通の健常者よりずっと正確に真面目にやってくれる。それがだんだんわかって、こういう人たちを雇う企業が出てきますが、まだ欧米に比べたら遅れています。障がいのある人たちも同じ地域の仲間であることを思い出して、ちょっとしたご配慮をいただけたら、大変うれしいです。

